

都市の記憶を記述し地域の平穏を回復する都市フィールドワークについて

小笠原 伸 (白鷗大学)

assamtea@fc.hakuoh.ac.jp

1. はじめに

筆者はこれまで都市におけるフィールドワークによる都市空間の読解と記述に関わる研究に携わり、都市を歩き見つめるという魅力とその活動により都市に存在する歴史や文化、さらには多くの地域資源が発見されることを経験してきた。

都市を歩き見つめるという行為はその中で、単に都市の空間的な魅力を知るにとどまらずに人が地域に存在する歴史の重層性や建築、都市景観に支えられて生きているということを学ぶ機会を多数得ることができる。何気ない活動に思われているが街を見つめるのは人間の存在にとり大変重要であり、さらには次代にその記憶を引き継ぐための大切な行為であることを知り、都市のフィールドワークを「街歩き」と称して各地で複数の人々により自分たちの街を歩き見つめる、さらには産業振興や観光につなげるための活動を続けてきた。

都市は経済活動の拠点であるとともに人々の生活を営む領域でありその記憶の場であり、表現のフィールドともなりうる。それらが突然に失われた際に人々はどのようにかつての生活や営み、さらには多くの記憶を取り戻してゆくのかということがくしくも今回の東日本大震災では問題として提示されることにもなった。

その中で、今回の震災においては上記活動の範疇において福島県いわき市を中心とした都市の記録に携わったプロジェクトが存在する。

都市の読解、記述の側面とともに、かつてそこに存在したものや風景を画家がかつて描かれた作品などから都市のイメージと記憶を取り戻し、その上で地域が失ったものや空間について

もしっかりと市民と見つめてゆく、地域的な平穏を回復する活動を行っている。

その中心となった画家で日本芸術院会員、早稲田大学理工学術院教授の藪野健氏にヒアリングを行った内容を報告し、都市論と芸術表現の両面からこれら活動の意味を考えるものである。藪野氏は長年に渡りいわき市の風景や建築を描く活動を行なうとともに今回の震災後は早くから現地に入り、地震や津波で破壊されたいわき市の状況を見つめ、震災前の様子と重ねあわせながらその像を結び、破壊された街並みや建築物を描いてゆくとともに、さらにはいわき市の地元の方々との交流を続けてきた。

以下はいわき市における活動についてヒアリングを行った際の藪野氏の発言を抜粋したものである。

2. ヒアリング内容

藪野氏が現場に入ったのは5月だったが、まだ津波被害の復旧前であり、被災を免れた地域に隣接し多くのがれきが放置されたままであったという。

「（いわき市の震災被害について、一部の）建物は残ったかもしれないけれど、生活の基盤が根底から覆されている。災害というのは形が残ったから災害が平穏だったわけではなくて、生活の基盤になる漁業や工業とか商業とか、それが壊滅的になくなってしまった。そのことを考えてしかも恐怖とか、電気がこない水がこない、エネルギーが全然ダメである、お医者さんに通えない、そういうことがもたらす不安感というのは非常に限りなく大きくて、だから全部流出したところと同等に考えたほうがいいん

じやないかと。何がふさわしかった何がふさわしくなかったということじゃない、何がよかつた何がよくなかったということじゃないと考えた方がいい。」

都市が災害で失ったものは戻らぬが、その記憶を求めて歩き始めることは誰にでも出来ることであるとともに人々が生きる上での美に関わる点で、芸術分野の領域でもある。

そして地域資源など特別なものばかりではなくごく一般の街の風景を見つめ記憶として維持する必要に言及する。

「街を歩くというのはどういうことかと言うと、多くの人達が表通りを歩きながら街が変わってゆく、そしてそれが今の普通の風景に見えけれど一歩中に入つてみると古い建物が点在しながらある。で、そのことを考えると、街っていうのも人間と同じように、生きたり死くなったりそういうものがあって、病気だったり。だから生まれ変わつていったりするのがいいんだけど、日本のように例えば震災、それから水害、あるいは空襲のようなもの、根こそぎ壊れてゆく場合に、残った昔の場所を歩くという、あるいはその全部がないわけではないところを歩くというのは人間にとつての美意識の根源になっている、構成する中の一つ、拠り所になっているのは何かと探すという点で大きいと思う。」

被災地が復興を目指す中で、物資や建築物が徐々に地域を満たしてゆく一方、必要なのは他者の自分たちへの関心、思つてくれているという理解ではないかと藪野氏は指摘する。

「（いわき市は）例えば自然に恵まれていますね。海があつて山が近く、産業がかつてあって文化があつて。」

「（いわき市の被災地を突然訪問しても）つまり自分たちが忘れられてないということについては関心を持ってくれていた。東北の中でも気仙沼などはともかく、いわきの海岸線などは関

心持たれてなかつたのではないか。千葉もそうだと思うんだけど、同じ被災地なのに。」

「多様なものが入つてくる必要があつて、物資だけじゃないですよ、被災地に入つてくるのは。普通の視点というかいろんな視点が入らなきやいけない。一色で片付けちゃいけない。」

画家が被災地に入つて何が出来るか、そして地元の方との関わりで何が起つるかということについて、役に立つという軸とは別の次元での発見、気づきについての被災地への貢献という点に触れている。

「経済的な効果を何も生まない存在もあつたつていいんじゃない。かつてそういう存在もあつたでしょう。絵かきなんて経済的な効果を生んでいるとはとても思えない。」

「すぐに経済的な問題と、結びつかないものの効果が出ないもの形に現れないものこそ、キーワードになりうると予測できるからじゃないだろうか。なぜかというと、精神的なものがプラスとかマイナスとか、お金に換算できないでしょう。効率とかそういう意味ではあるかも知れないけれど。」

「街歩きが一番大きいのは発見と、自分が気づいてないものを気づかせるということ。」

3.まとめ

本ヒアリングの中で、画家そして芸術表現が被災地について関わり都市の平穏を回復するために、失つたものを地域として見つめなおす必要性と、さらに今を描くことで被災地を忘れていないという投げかけや地域の過去と将来とを結ぶ眼差しの重要性、さらに発見や気づきを担う役割があるとの指摘を得ることが出来た。

参考文献：

藪野健「絵画の着想 描くとはなにか」2003年 中央公論新社

読売新聞記事「いわきのこころを描く」2012年6月27日

http://www.yomiuri.co.jp/zoomup/zo_110627_01.htm